F1-11

学生のキャンパス外における行動範囲に関する研究
—都市型キャンパス日本大学駿河台校舎学生行動調査—

A study on the scope of students ' activities on and off campus
City Campus Japan University Surugadai School student Behavior Survey

○佐藤瑞来[1],石塚百絵[1],日高昌那[1]赤澤加奈子[2],根上彰生[2]
Mizuki Sato[1], Momoe Ishizuka[1], Shona Hidaka[1],Kanako Akazawa[2] ,Akio Negami[2]

Abstract: In Chiyoda-ku area where a lot of students are crowded, it is thought that it leads to the exchange among students, the circulation of information, the contact with the society, and the revitalization of the whole town by putting out more students in the town. The purpose of this study is to investigate the range of free-time activities of students on the urban campus, and to provide them as information when making them. As a result of the survey, the scope of student activity is centered on the university from 500m radius within. It was found that the distribution was aggregated within the range. Moreover, the action alone was an increase tendency compared with the past research. In the future, we will increase the number of questionnaires and identify the relationship between the distribution of commercial facilities around the campus and the scope of activities of students.

1. 研究の背景と目的

１．はじめに

大学は，都市との関係の中で多くの形で発展を遂げており，教育の起源はコミュニケーションである．また,大学キャンパスは都市に組み込まれた広場と言える．その中で，日本最大の学生街として知られる千代田区に立地する大学は，都市型キャンパス型(1)大学が多いが，日常の行動は学内だけに留まらせずに都市の一辺として位置付けることが重要である．

千代田区周辺は老舗が多く，歴史的な建造物が点在している．さらに，古書店街，スポーツ用品の街，楽器の街とも言われる趣味多き街である上に，気軽に利用できる飲食店も多いエリアである．

しかし，近年の都市型キャンパス計画では，単純な講義や研究等の教室の室面積の獲得や管理のしやすさのみに重点が置かれ，学生の居場所づくりを十分に含んだ計画が少ない.[1)]

千代田区エリア(2)において，学生同士の交流や情報の循環，社会との接触が積極的になされ学生がより街を活用することは街全体の活性化につながると考えられる．

２．研究の目的

都市型キャンパス内外における学生の空き時間の行動から行動範囲を調査し，今後学園都市の活性化及びにぎわい創出を図る際の情報として提供することを目的とする.また，学生の大学周辺の空間利用特性を考察する．

３．既往研究と本研究の位置づけ

都市型キャンパスにおける行動範囲に関する一連の研究に，本研究は位置づけられる．林久順らの研究[1)]では，大学キャンパスが都市に対してどのようにあるべきかを検討し基礎データをつくる情報として提供することを目的とする.アンケートを用い，キャンパス内において居場所の 3 つの構成エレメントを明らかにし，キャンパス外において 400m 圏内の行動が多く，行動エリアを決定づける結果となった．

本研究では中心市街地の都心型キャンパス内外において学生の行動範囲から居場所を把握し，空間選択要因を明らかにしていく．

４. 研究の手順

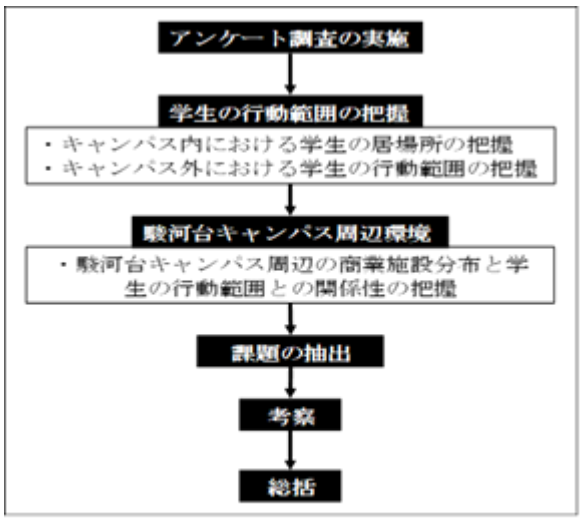

Figure 1. Flow of research

１日大理工・学部・建築　２：日大理工・教員・建築

５. 研究の概要

本調査では，駿河台キャンパスで学ぶ学生のうち学部 2～4 年生を対象に表 1 のアンケート項目で，アンケートを行った．平成 30 年 7 月 4 日(水)～7 月 19 日(木)の平日に実施し，アンケート用紙を配布した．
また，平成 30 年 8 月 24 日(金)に 23 区内の大学数の多い千代田区と文京区に位置している学生が自由に利用できるフリースペースを調査した．

６. 研究結果

(1) アンケート調査結果

Table 1. Aggregate number of questionnaire

アンケート人数						
	2 年	3 年	4 年	M1	M2	合計
女性	6	3	7	0	0	16
男性	10	2	3	0	0	15
合計	16	5	10	0	0	31

アンケートを実施した結果，サンプル数を 31 件得ることができた．アンケート集計人数の詳細は表 1 の通りである．
プロットして行動範囲を分析した結果，複数人で行動する際は御茶ノ水駅周辺の店舗と駿河台道灌道周辺の店舗に集まっているが，1 人の際は行動が分散していることが判明した.講義終了後に立ち寄る人は少なく，1 人と複数人での行動パターンが似ていることが分かる．立ち寄る場合も駅前の店舗に立ち寄っていることが判明した．

Figure2. Total distribution and university area map

引用：地理院地図

（２）実態調査結果

千代田区に位置している WATERAS COMMON(1F:サロン，2F:ギャラリー)に訪れた．
施設は Wi-Fi が完備されている．1 階では一人で食事

Figure 3. Free space

を取る社会人がいる一方で，2～3 人の学生グループがおり少しにぎやかな傾向となっていた．また調査日については女性が多く利用していた．2 階では男性が 1 人で読書，パソコン等をしており，くつろげる空間となっていた．2 階は男性の利用者が多い傾向であった．

７. 考察

アンケート調査より，図 2 の全分布と大学のエリア図から，半径 500m 圏内に分布が集約しており，徒歩圏が狭まっていることが分かる．また，御茶ノ水駅周辺と駿河台道灌道周辺に 2 分割しており，活動拠点地が 2 つあると考えられる．また，アンケート結果から 1 人でも周りを気にせず長時間利用できる場を半径 500m 圏外に設けることで行動範囲が広がり，地域の活性化にも繋がるのではないかと考える．
続いて実態調査より，千代田区と文京区のフリースペースを比較した結果，文京区の大学周辺には企業がスポンサーとなっている学生が無料で利用できるスペースが多く見られた．しかし，千代田区においてはあまり見られず，学生の居場所が学内にとどまっていることから学生の行動範囲が狭まっていることが明らかになった．

８. 註. 参考文献

(1)都市型キャンパス:都市に立地し駅から近く，交通便の良いキャンパス
(2)千代田区エリア　行動範囲:世論調査 2)によると，20～29 歳の歩いて行ける範囲 501~1000m の割合が半数近く占めているため，学生の行動範囲 1000m を限度として定める

1)林久順，金子雅人，長峰麻衣子，山本圭介：「学生のキャンパス内における居場所獲得様態に関する考察-市型キャンパス東京電機大学神田校舎学生行動調査その 1-」，東京電機大学大学院　(2003.9)
2)内閣府大臣官房政府広報室：世論調査報告書平成 21 年 7 月調査 (2018 年 7 月 1 日閲覧)
https://survey.gov-online.go.jp/h21/h21-aruite/index.html